■ 論　　文

追手門経営論集，Vol.26, No.2,「別冊」
pp.27-37, January, 2021

高校生の短期海外留学プログラム参加経験がキャリア形成に与える影響

石盛 真徳・西尾　建

Effects of High School Students'Experience of Short-term Overseas Study Abroad Programs on Career Development

Masanori ISHIMORI and Tatsuru NISHIO

Otemon Business Management Review, Vol.26, No.2

■ 論　　文

追手門経営論集，Vol.26, No.2,
pp.27-37, January, 2021
Received November 24, 2020

高校生の短期海外留学プログラム参加経験がキャリア形成に与える影響

石盛 真徳・西尾　建

要　旨

外国語を用いた外国人とのコミュニケーション能力の向上には、スポーツや職業体験などのアクティビティを組み込むことが有効とされ、日本からの海外留学において提供されるプログラムでは、英語を中心とした言語教育だけでなくスポーツや職業体験などに多様化している。ニュージーランド政府とエデュケーション・ニュージーランド（ニュージーランド教育省）は2014年に英語学習とスポーツを学ぶGame on Englishプログラムをスタートさせた。本研究では、2014年から2019年までの過去6年間のGame on Englishプログラムで、高校生時にラグビー留学を経験した大学生8名に対して半構造化インタビューを実施した。そして彼らの留学経験が、その後の英語学習、ラグビー活動、および進路選択にどのように影響しているのかを検討した。その結果、日本の部活動の長時間練習による問題点やニュージーランド指導者の部員の自律性支援の重要性が示された。また、留学経験がアスリートのデュアルキャリアにも好影響を与えることが示唆された。

［キーワード：留学プログラムの多様化，高校生，スポーツ，キャリア形成］

Abstract

In order to improve communication skills with foreigners, it is important to incorporate activities such as sports and work experience study abroad program for Japanese participants. Education New Zealand launched the Game on English program in 2014 for students to study English and sports. In this study, we conducted semi-structured interviews with 8 college students who had participated in the "GAME ON ENGLISH" program in New Zealand high schools for the past 6 years from 2014 to 2019. In addition, we examined how their study abroad experience influences their subsequent English learning, rugby activities, and career choices. As a result, the problems of burn out by long time training in Japanese club activities, and the importance of supporting member's autonomy by coaching in New Zealand were shown. It was suggested that the experience of studying abroad has a positive effect on the dual career of athletes.

［Key words: Diversification of study abroad programs, High school students, Sports, Career Development］

1．研究の背景と先行研究

1.1　高校生の海外留学経験の効果に関する研究

返済不要の奨学金や研修等を通して留学を支援する制度「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」において高校生コースが設置され（文部科学省, 2013）、また2015年度より「社会総がかりで行う高校生留学促進事業（文部科学省, 2018a）」が継続して事業化されるなど、近年、意欲のある若者の留学を高等学校段階から支援する事業が積極的に展開されている。また、「社会総がかりで行う高校生留学促進事業（文部科学省, 2018）」においては、語学留学だけでなく、現地でのインターンシップや、文化、スポーツ、ボランティア等のプログラムも事業対象となっているように、留学プログラムの多様化が進んでいる。これは高校生が「留学したらやりたいこと」として、「語学力を向上させたい」、「外国の人と友達になりたい」、「外国の文化、スポーツ、歴史、自然などに触れたい」という回答を半数以上が挙げている（文部科学省省初等中等教育局国際教育課, 2011）ように、高校生側の留学目的の多様化を反映したものといえる。しかしながら、高校生の多様な留学経験を対象とした研究だけでなく、高校生の留学経験自体を対象とした研究自体がほとんど行われておらず、研究の知見は蓄積されていないのが現状である。長井（1986）は、「日本人交換留学高校生の異文化への適応過程」を検討した論文の冒頭で、「高校生の交換留学が始まって以来すでに30年が過ぎ、また昨今この活動がますます盛んになりつつあるが、交換留学高校生の異文化への適応に関する心理学的研究は非常に少ない」と指摘しているが、その後さらに30年が経過した現在も変わっていないといえる。そのような中で、高校生の留学経験を対象とした数少ない実証的研究において、大前ら（2016）は、2週間程度のカナダでのボランティア体験を含む海外研修に参加した高校生を対象に、留学から半年後に調査を実施した。そして大前ら（2016）は、海外研修への参加が彼らのボランティア活動と知識取得活動を促進させること、そして知識取得活動は、将来国際的に活躍したいという志望を高めていることを示した。

スポーツのプログラムを含む留学に関しては、西尾（2017）が、ラグビーと英語のプログラムを含む留学プログラムに参加した高校生を対象に調査した基礎的な調査で、「ホストファミリーとのコミュニケーション」など言葉に関するものが、留学を通じた問題点として多く挙げられ、「現地高校と（ラグビーの）練習と試合ができたこと」、「ラグビーがより好きになり英語も好きになった」などがよかった点として挙げられたことを報告している。また石盛・西尾（2020）は、同じラグビーと英語のプログラムを含む留学プログラムに参加した高校生に対する質問紙調査の自由記述データを分析し、留学経験が参加者の英語学習への意欲を高め、国際的な視野を広げるきっかけやラグビーも含めた文化の違いを認識する機会を提供していること、また一部の参加者においては、英語学習への動機づけが、大学進学の際の進路や将来的なキャリア選択の展望へも影響も与えていることを示唆している。

このように高校生を対象とした研究はわずかしか存在していないが、大学生対象にした海外留学経験の効果に関する研究は、キャリア形成に与える影響も含めて幅広く行われている。もちろん、高校生と大学生という時期はともに、Erickson（1959）の心理社会的発達段階では青年期に含まれ、未来の自己がとるべき社会的役割を明らかにするというアイデンディティの確立が発達課題とされており、大学生の留学研究の知見を、高校生の留学にもある程度は適用できるであろう。しかしながら、日本における発達心理学的研究では、個人の適応や心理的健康において必要不可欠とされる自尊感情（中間, 2013）が中学生から高校生にかけて低下し、高校生期から大学生期にかけて上昇するU字型を示すことが繰り返し確認されている（千島, 2015; 伊藤, 2001; 岡田・永井, 1990）など、学校段階による心理学的状態の違いが指摘されている。自尊感情は、低い場合には自分を変えようとする動機づけとして機能する点でも重要な概念でもある（Kiecolt,1994）。

さらに千島（2016）は、大学生は将来の自分を

見据えた自己変容を使用しやすいのに対し、高校生では以前の自分を取り戻したいという懐古志向が比較的高いことを、学校段階別の時間的展望研究から明らかにしている。高校生と大学生の心理社会的発達段階による違いとは別に、社会制度的な位置づけでも両者は大きく異なっている。例えば、2018年3月の中学卒業者で高校への進学率は98.8%となっており（文部科学省, 2018b）、義務教育終了後にほぼ全員が高校に進学する状況である。これはどの高校に進学するのかは進路選択上の問題となっても高校進学自体は自明視されているといえる状況である。したがって高校卒業時点で個人ははじめて就職するのか、進学するのか、また進学するしても、どの種別の学校に進学するのかという多様な進路選択課題に直面するといえる。それゆえ、高校卒業時の進路選択に留学経験がどのような影響を及ぼしているのかを検討することは重要であろう。高校生の留学経験は、直接的な高校での学びや、続く高校卒業後の進路選択へと影響するとともに、直接的な関連性は薄くなるものの、大学等へ進学した場合のそこでの勉学や課外活動、さらには大学等の卒業の進路選択へと各自の志向性への影響を通じて、様々な影響を及ぼすものと推察される。

1.2 大学生の海外留学経験のキャリア形成に与える効果に関する研究

新見・秋庭（2016）は、留学経験者が留学未経験者と比較して、外国語運用能力、異文化への関心、異文化に対応する力だけでなく、社会的汎用性、意識の高まりについても高く自己評価していること、また留学経験によって自身のアイデンティティをより多角的にとらえ、自己効力感や自己肯定感も向上していることを示した。また新見（2016）は、短期海外留学経験が就職・進路に関する意識に与える影響について、オーストラリアにおける1ヶ月の短期海外留学の経験者を対象とするインタビューデータから、留学経験者は異国の地での生活経験が自信となり、海外に対する心理的な抵抗を弱め、国際的な場面での仕事に関わる自分を想像できるようになったと例証している。

他にも、田浦ら（2009）は、ニュージーランド留学経験者を対象に、短期英語プログラムの成果と問題点を、社会的文化的側面と語学面について検討した。彼らは、リスニングテスト・スピーキングデータおよび異文化体験による視野の広がりや英語学習の動機に関する事前・事後のデータ、学生のプログラムへの評価、そして付き添い教員による観察記録を活用して多面的に留学の効果を検討した結果、リスニングの向上、3週間では異文化体験は進んだが異文化理解は進まないこと、学生の評価では、異文化社会で生活できる自信が得られたこと、教員評価では、アカデミックプレゼン能力の向上と準備の重要性が指摘された（田浦ら, 2009）。体験型プログラムについては、鈴木（2018）が、ニュージーランドのオークランド地区周辺での8つの体験型海外研究プログラム（①ファームステイ、②植樹ボランティア、③幼稚園や保育園での交流活動、④企業訪問、⑤博物館見学、⑥植物園見学、⑦動物愛護協会訪問、⑧工場見学）の経験者の研修日誌を対象にテキストマイニングによる分析を行っている。そのテキストマイニングの結果では、検出されたキーワードは肯定的な印象を示すものがほとんどを占めると同時に、異文化環境における活動を通して新たな気づきを導いていることを明らかにしている（鈴木, 2018）。

奥山（2017）は、早矢仕（2002）の「集団全体での変化傾向を量的に把握することも大切なことではあるが、一人一人のおかれた立場や経験内容を吟味しつつ比較検討するような質的研究もなくてはならないものであり」という問題提起を踏まえ、面接データをM-GTAの手法で分析するという質的な研究アプローチを用いて、学生の留学中の意識変容に着目し、それがどのような要因で生起し変容していくかそのプロセスを考察する研究を実施した。奥山（2017）の研究協力者には、留学中のサッカーのケースも含まれているが、全体的な結果としては、「自己効力感→モチベーション→行動→成功体験→自己効力感」の正のスパイラルが留学の効用として見出せたとしている。また、奥山（2017）は発達段階というステージを念頭において学生を見ることの重要性を指摘し、質

的研究方法が、学生間の強い横並び意識や同調意識の存在とそこを離れることへの強い不安感をより鮮明に浮かび上がらせたと述べ、友人とのつながりから離れることにつながる海外留学への阻害要因の一つとなっていることを指摘している。

本研究では、これまで長井（1986）によってその必要性が指摘されているもののあまり研究の蓄積のない高校生の留学経験について、特にその後のキャリア形成に与える影響に焦点化して検討を行う。すでに論じたように、高校生と大学生のライフサイクル上の位置は心理的にも社会制度的にも異なっており、その後の選択の幅も異なるが、すでに多くの知見が蓄積されている大学生に関する研究も必要に応じて参照しつつ考察を行う。用いる方法論としては、早矢仕（2002）の「一人一人のおかれた立場や経験内容を吟味しつつ比較検討するような質的研究もなくてはならないものであり」という問題提起を受けて、半構造化面接法を採用する。そして、留学プログラムの多様化の進む現状においての意義を踏まえ、スポーツプログラムを含む留学を対象として検討する。

1.3　GAME ON ENGLISHプログラムの背景

本研究では、スポーツに関するプログラムを含む留学として、エデュケーション・ニュージーランド（ニュージーランド教育省）が後援、フォンテラジャパンがスポンサーとなり、2014年から実施しているGAME ON ENGLISHプログラムの参加者を対象に調査を実施する。GAME ON ENGLISHプログラムとは、2014年7月7日、ニュージーランドのオークランドで日本の安倍晋三首相（当時）とニュージーランドのジョン・キー首相（当時）によって宣言されたニュージーランド政府主催（エデュケーション・ニュージーランド）の教育事業であり、日本の青少年に向け、英語の集中学習と専門的なスポーツ訓練を一体化させた教育事業として注目を集めている（エデュケーション・ニュージーランド, 2017）。日本では2014年に英語学習にラグビーの体験をプラスしたプログラムを開始し、2020年現在までに200人を超えるの日本人の高校生がニュージーランドに派遣されている。ラグビープログラムは、毎年12名前後を対象として男女別々に夏休みの3週間実施している。女子はスポーツ庁のサポート（日本ラグビーフットボール協会, 2019）、男子はニュージーランドの乳業最大手フォンテラ社の日本法人であるフォンテラジャパン株式会社がスポンサーとなり、日本－ニュージーランド間の往復航空運賃、英語およびラグビートレーニングの研修費用を参加者に支給している（フォンテラジャパン, 2019）。なお、ニュージーランド国内の受け入れに際しては、5つのラグビー協会（オークランド、ワイカト、ベイオブプレンティ、カンタベリー、オタゴ）が協力している。

2．本研究における調査方法

2.1　調査対象

本調査の目的は、GAME ON ENGLISHプログラムへの参加の中期的影響を検討することであったので、2014年から2019年にかけての6年間のGAME ON ENGLISH男子プログラム（参加当時は高校1年生または2年生）の参加者のうち留学後2年以上経過している者に対してインタビュー調査への協力を依頼し、同意の得られた者を調査対象とした。調査協力者は、現在4年制大学の1年から4年に在籍している留学後2年から5年経過した8名であった（表1）。なお、GAME ON ENGLISH男子プログラムには、関東地方のラグビー強豪校の高校から、それぞれ監督推薦を受けた高校生が参加し、2014年にはオタゴ大学とオタゴラグビー協会、2015年から2019年はワイカト大学、ハミルトンボーイズ高校、およびワイカトラグビー協会によって実施された。

2.2　インタビュー調査の実施方法

インタビューは2019年9月に、フォンテラジャパン株式会社本社会議室において、調査対象者8名を3つのグループに分けて、各個人に対して質問を行うグループインタビュー形式で実施した。面接をグループインタビュー形式で実施したのは、GAME ON ENGLISHへの参加から数年経過していることから、他の調査協力者の発言を聞い

表1　インタビュー調査協力者のGAME ON ENGLISH参加年、大学の学部・学年、および活動状況

調査協力者ID	GOE参加年	大学の学部・学年	部活動等での活動状況
A	2017	経済学部1年	体育会陸上ホッケー部
B	2015	法学部3年	体育会ラグビー部
C	2015	経済学部3年	IT系ベンチャー企業でインターン
D	2015	スポーツ系学部3年	体育会ラグビー部
E	2016	スポーツ系学部2年	体育会ラグビー部
F	2014	商学部４年	体育会ラグビー部
G	2014	政策系学部4年	体育会ラグビー部
H	2014	国際系学部4年	音楽、オーストラリアンフットボール

て、自身の当時の状況を想起させることを促すことができる、というメリットを重視したためである。もちろん、グループインタビューで実施することは、他者の発言に影響を受けてしまう、自分の発言を自由に行えない、といったデメリットも存在するが、本研究ではメリットをより重視して採用した。各グループのインタビュー時間はそれぞれ40分程度であった。インタビューではあらかじめ、GAME ON ENGLISHプログラムのラグビー、英語学習、およびその後の進路に対する影響についての質問を用意し、半構造化面接として実施した。なお、各質問について各調査協力者が回答する時間を十分に確保し、自分の発言を自由に行えないというデメリットを低減させるように留意した。

3．結果と考察

3.1　インタビュー調査結果の内容分析

表1では、インタビューの調査協力者の GAME ON ENGLISHの参加年、大学での所属学部、体育会ラグビー部での活動の有無、およびその他の活動状況についてまとめた。インタビュー対象者のうち、大学でも体育会ラグビー部に所属し活動しているのは、8名中5名（B、D、E、F、およびG）であった。ラグビー部以外の体育会のクラブで活動している者が1名（A)、その他の活動をして者が2名（CとH）であった。大学において、国際系領域の学びを選択したものは2名（BとH）であった。

以下の分析では、図1に示したインタビュー対象者のGAME ON ENGLISH参加以降の高校・大

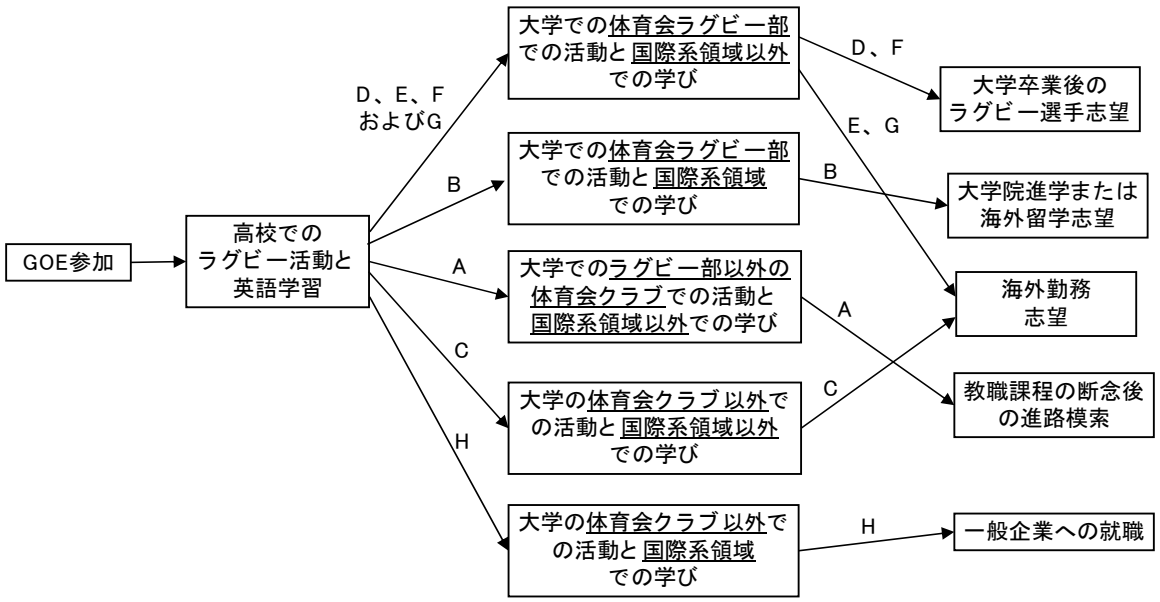


図1　調査協力者のGAME ON ENGLISH参加以降の高校・大学での活動および大学卒業後の進路選択の径路モデル

学での活動および大学卒業後の進路選択の径路モデルの各時点の活動に、GAME ON ENGLISH参加経験がどのような影響を与えたのかについて、インタビュー対象者の語りを関連付ける内容分析によって検討する。この径路モデルでは、GAME ON ENGLISH参加後に、まずそれぞれが在学中の高校に戻り、ラグビーの部活動と英語学習を行うところまでは全員共通の径路をたどっている。その後、大学進学に際して、体育会ラグビー部でラグビーを続けるかどうか、あるいは国際系領域の学部で学ぶかどうかの選択に応じてそれぞれの径路が分岐し、さらに大学卒業後にどのような進路選択を想定しているのかでさらに径路が分岐しているというモデルである。矢印に付置されたAからHまでのアルファベットは、その経路をたどった表1の調査協力者のIDを示している。

3.2　GAME ON ENGLISH参加の高校でのラグビー活動と大学での活動への影響

本研究の調査協力者はすべて関東地方のラグビー強豪校の高校から、それぞれ監督推薦を受けて留学参加しており、留学終了後は、自分の高校に戻ってラグビー部の活動に参加することになる。はじめにニュージーランドでのラグビープログラムがその後の日本でのラグビー活動にどのような影響を与えたのかについて検討する。なお調査協力者の語りの中の（　）内の言葉は、発言内容を補足するために筆者が挿入したものである。

日本とニュージーランドでの練習の違いについては、8名全員がインタビューにおいて言及していた。中でも多く言及されていたのは、ニュージーランドでの「練習時間の短さ（調査協力者C、E、G）」と「ラグビーを楽しんでいる（調査協力者D、F、G）」ということであった。ラグビーに限らず日本の部活動、特に強豪校においては、大会で勝つという「競争」を重視し、勝つことが楽しく、やりがいがあるがゆえに子ども達は練習に、教員達は指導にのめり込み、練習時間がどんどん増大してしまうというという循環が行き過ぎていることが指摘されている（野村ら, 2019; 内田, 2017）。「高校のときは勝つことというか、そういうことにやっぱりこだわりを持ってた（調査協力者F）」という語りにもみられるように、ラグビー強豪校から参加した彼らにとってニュージーランドでの「練習時間の短さ」が強く感じられたのであろう。調査協力者Eは、留学中から「練習時間が短い」ということを他の練習内容と一緒に日本の監督に伝えていた。しかし、ウェイトトレーニングの内容などがその後の練習に取り入れられたのに対し、練習時間の長さは変化しなかったという。

「ラグビーを楽しんでいる」ということに関しては、「僕もやっぱラグビーが楽しかったから始めたんで、そういうことをニュージーランドのラグビーの人たちと一緒にやるときにすごい感じて、そこはもう、自分が本質的なものに帰れたというか、そう思えるようになったのも留学を経てですね（調査協力者F）」と語るように、かつては彼らもラグビーに対して感じていたことである。しかしながら、長時間練習の中で、「日本のほうはやっぱ、練習に対してネガティブになってる選手が何人かいる（調査協力者G）」というような状況が生じる。練習に対するモチベーションを維持するためには、単なる時間の長短ではなく、「（指導者が）何がポイントかというのを最初に教えてくれる（調査協力者A）」というのも重要であり、それが「ニュージーランドはすごい自発的にフィットネスとかもやったり（調査協力者B）」と内発的な動機づけにつながる。池本・伊藤・杉山（2013）の研究でも、部活指導者の自律性支援（「練習の内容やメニューについて自分たちの意見を聞いてくれる」などの項目で測定）が、部員の自律性欲求（「練習メニューは自分の長所を伸ばすのに適している」などの項目で測定）を満たすことを通じて、内発的動機づけを高めることが示されている。深見・井上（2019）の研究でも、部員は自分たちで話し合って決定することを良しとするが、実際にそれを達成するための練習方法については指導者の主導性に期待していることが示されている。しかしながら、「日本のコーチの一部の人だと、この練習がなんのためにやっているかわからない状態で練習が進んでいたりする（調査協力者A）」という事態も指摘されている。

ニュージーランドでの留学プログラムで日本とは異なるラグビーに触れた経験は、参加した高校生のその後の進路にも影響していることがみてとれる。例えば、「ニュージーランドはすごい自発的にフィットネスとかもやったり、そういうところでラグビーの違いも感じられて、それがあったから、今でも多分、僕は大学でラグビーを続けられているのかな（調査協力者B）」や「ニュージーランドから帰ってきてからも、その楽しさを自分の中で持ちつつ、ラグビーを続けられてるから、今も続けて楽しくラグビーができてるのかなと思います（調査協力者D）」というように、大学で体育会ラグビー部での活動を継続する原動力の一つとして認識されている。

また、留学経験は大学進学後にラグビー以外の活動を選択することにも影響していた。例えば、「ラグビーだけじゃなくて、一年のあいだにいろんなスポーツをやるという話を聞いたりとかもして、やっぱ、自分もなんか、1個だけじゃなくて、いろんなものを取り入れたいなというのが、ちょうど大学に行くのがいい転機かなと思って（調査協力者A）」というようにラグビー以外のスポーツ活動につながったり、「ラグビーを終えるきっかけにはなってないんですけど、ただ、好きなことをとにかくやってみようみたいな考え方に行き着いたことには、結構深く関わっています（調査協力者H）」、「ニュージーランドに行ったときは、ラグビーだけやってる人というのが意外と少なくて、ラグビー以外にもスポーツをやってたりとか、そういう子が結構いたので、ひとつに必ずしも絞らなくても、やりたいことをどんどんやってみるという考えもあるんだなと（調査協力者H）」というようにラグビーは高校で終えて、大学では関係のない活動に取り組むことに深く影響したと認識されている。

ニュージーランドも含むオセアニア諸国や欧米などでは、中学・高校においてもスポーツ活動が季節制で、生徒のスポーツの選好にあわせて複数のスポーツを経験できるシステムになっており（中澤2011；西尾2016）、強豪校の生徒も他のスポーツに触れ合う機会が提供されている。それに対して日本では、中学・高校での部活動は一つに絞らなければならず、そのことが参加者のギャップ体験につながっている。この問題に関しては、独立行政法人日本スポーツ振興センター（2014）がアスリートの「デュアルキャリアに関する調査研究報告書」において、国内の競争においても、トップレベルで競い合うアスリートの数はごくわずかであり、アスリートとしての潜在能力の最高到達点に達する努力をすることも、アスリートとしての人生よりも長い一人の「人」としての人生の両方を念頭に置き、必要な教育やスキルを習得する機会を得ることは重要であると指摘している。

GAME ON ENGLISHのような短期海外留学プログラムは、結果として、デュアルキャリアを考える契機として機能していたと考えられる。もちろん、調査協力者F（年代別の日本代表にも選抜されているトップアスリートであり、ラグビーのトップリーグのチームへの就職も内定している）が、「日本のトップリーグもすごい海外の選手も増えてきて、そういうことで、やっぱ、今、通訳の方がいるんですけど、自分が、英語が話せたら、監督、コーチ陣のそういうこともじかに聞けますし、自分の言いたいことも発信できるというのは、英語を身に付けておけば、すごい僕自身も成長できますし、これから海外にチャレンジするとなっても幅が広がる。そのコミュニケーションの部分で多分、苦労してる選手はすごい多いと思うんで、そういう意味では、そういうところを成長していったら、もっともっと自分の幅が広がるんじゃないかなとは感じています。」と述べているようにごくわずかのトップアスリートの海外経験の機会としても役立っていた。

3.3　GAME ON ENGLISHの高校での英語学習と進路選択への影響

大学生を対象とした先行研究において、留学経験者では、外国語運用能力、異文化への関心、異文化に対応する力だけでなく、社会的汎用性、意識の高まりについても高く自己評価していること（新見・秋庭, 2016）や異国の地での生活経験が自信となり、海外に対する心理的な抵抗を弱め、国

際的な場面での仕事に関わる自分を想像できるようになったこと（新見, 2016）が指摘されている。

GAME ON ENGLISH参加者でも同様の認識の変化についての言及が、「これから先、海外に行くかどうかというのは、まだ自分の中であまり強くはないんですけど、でも、一回、経験したからこそ、どういうふうにコミュニケーションをしようかとか、英語でどんどんチャレンジしていこうという気持ちは強くなりました（調査協力者A）」、「実際にニュージーランドに行く機会をもらって、行かせてもらって、すごいコミュニケーションの取り方だったり、日本人同士で話す英語とは全然違ってて、そういう面ですごい、今まで自分の考えていた、そういう英語の価値というものがちょっと違うふうに見えてきたなという部分が大きくて、それが一番大きかったです（調査協力者B）」、「1個上の先輩に英語を話せる方がいたんで、そういう方とコミュニケーションを取ったりだとか、いろんな本当にちょっとしたことですけど、英語で映画を見るのも聞くようにしたりだとか、そういうちっちゃなことなんですけど、そういうことを継続してやるようになったのは、この留学を経験してからですね。（調査協力者F）」および「語学の面で英語の部分は、やっぱりコミュニケーションの部分、本当に未熟だったのでわからなかったんですけど、3週間という短いあいだだったんですけど、最初よりは最後のほうが聞く部分だったり、そういう部分は成長したなというように自分自身、感じたので、海外に対する変な怖さだったり、そういうのはこのGAME ON ENGLISHでなくなりましたし、海外の興味というのもすごい湧きました（調査協力者G）」という語りにおいて示されている。

もちろん、一方では、3週間という短い期間のプログラムの限界についても、「自分はちょっと人見知りなんで、受け身だったんですね。プログラム、決められたプログラムだけやっているみたいなイメージだったんで、もうちょっとアクティブに、積極的に、疑問に思ったことは多分、自分の心の中で止めたまま終わらせていたと思うんですね。あんまり覚えてないんですけど、多分、もう少し積極的にいろいろ聞いたり、活動したりすればよかったなという後悔はあります（調査協力者D）」というように自分の関与度の問題や、「あんまり英語の準備、英語の勉強をして行かなかったんですけど、もっと英語を勉強して行けばよかったなというふうにすごい思ってて、そのホストファミリーになんか自分の伝えたい思いだったりとか、感謝の気持ちとか、そういうのを日本語と同じレベルで表現したかったんですけど、やっぱ、そういうのが難しくて、それがすごい悔しかったんで、英語をもっと勉強して行けばよかったなと（調査協力者C）」という準備不足として語られている。

3.4　GAME ON ENGLISHの大学卒業後の進路への影響

GAME ON ENGLISHの大学卒業後の進路選択への影響は、例えば、高校2年生で留学を経験した場合でも、大学3年までは約4年間の期間が隔たっており、直接的にはさほど大きくないと考えられる。しかしながら、GAME ON ENGLISHへの参加経験が高校での活動や大学での活動に影響し、それが間接的に大学卒業後にまで影響を及ぼすということは十分に考えられるので、以下で個別に検討を行う。

調査協力者Aは「入学当時は教職のほうに行きたいなと思って、教職課程を履修してたんですけど、話をいろいろ聞いていくうちに、ちょっと合わないなというのがあって、今それを前期で終わらせてしまった直後なので、まだ今のところ、次どうしようというような感じで、取りあえず、もう単位はしっかり取って、ちゃんと4年間で終わらせてというのが、一応、目標ではありますけど、なんだろう、今その直後なんで、まだそんなすぐに、なんかこれというのが、今、模索中という感じですね。」と教職課程の履修という目標を失った状況であり、今後の進路選択を模索中であり、そこにGAME ON ENGLISHの影響は特に認められない。

調査協力者Bは大学卒業後の進路選択について、「私が考えてるプランとしては、まだ就職活動に

ついては特に深く考えていなくて、今、ラグビー部に所属していて、4年間、一応、自分の中でやりきろうというのを決めてて、そのあと、今、私自身、法学部に所属してるんですけれども、すごい自分の好きな分野で、もっと知りたいな、みたいに思うところがあって、国際関係の法律についてすごい興味がありまして、よければ、その先の大学院であったり、それこそ海外の大学で何かもう一度、学び直せたらなとか。まだ全然、決まっていませんけど。」とまだ未決定といいつつも、専門の法律と海外での活動を結び付けた志望を語っている。すでに述べたようにGAME ON ENGLISHの英語学習への影響に関して、調査協力者Bは「そういう英語の価値というものがちょっと違うふうに見えてきたなという部分が大きくて、それが一番大きかったです。」と語っていたように、間接的には、国際的な活動への志向性には少なからずGAME ON ENGLISH での経験は影響しているといえるであろう。

現在、IT系のベンチャー企業でインターンをしている調査協力者Cは、「エンジニアに関しては、あんまり留学の影響とかはないんですけど、でも、仕事をやるうえで、どうしても英語のドキュメントとかを見たりとか、そもそもプログラムを書くコード自体が英語なので、このプログラムの参加によって、そういった英語を見たり、読んだりという、抵抗を少しでも取り除くことはできたのかなと思っています。」と英語への抵抗感を引き下げたという限定的影響ではあるもののGAME ON ENGLISHの影響を認めている。

現在大学3年生の調査協力者Dは、「自分は、ラグビーをこのまま続けて、トップリーグに入ることを目標にしていて、ラグビーをやることはもう決めていて、そこでしっかり選手として活躍したあとは、コーチ、または教師になって、ラグビーを教えるという立場に付いて、この留学で得た経験とかも教えられると思うんで、そういったところで海外と日本をつなげるとか、そういうこともしてみたいなとは少し考えています。」と引退後という遠い将来においてであるが、留学経験を活かしたいとしている。

トップリーグに内定している調査協力者Fは「また留学に行きたいなというのは、本当にこのGAME ON ENGLISHを経てすごい感じてましたし、K大学という道を選んだんですけど、これから先、海外にもチャレンジしていきたいなという気持ちはすごいあって、それがラグビーだけでなくても、会社として海外へ派遣されたりとか、そういう仕事もしてみたいなと思うのは、今もすごい思ってるんですけど、そういうのは、このやっぱり、GAME ON ENGLISHがきっかけなんで、そういう部分ではすごい僕に影響を与えてるなと感じます。」とラグビー以外の仕事での英語の活用についても言及している。

調査協力者Gは「大学でちょっとラグビーは終えようかなという感じで思ってまして、大学でしっかり、目標的には、海外に行くという面では、会社の転勤で海外研修、海外に行くとか、そういった面は、ちょっと思いはあるんで、そこに目標を目指していきたいなと考えております。」と大学でラグビー選手としての活動を終えた後の目標として、海外での仕事を挙げている。

調査協力者Hは、「(進学する大学の学部を) 選ぶ段階で一応、法学部とか、経営学部もあったんですけど、その中で (国際系) のG学部って、けっこう名前も初めて聞いて、わりと新しい学部ではあったので、その名のとおり、けっこう国際的な面も授業だったり、授業外のことでもあったり、国際的な部分が絡んできてたので、その高校生のときにニュージーランドに行った経験はけっこう大きかったですね。」とGAME ON ENGLISHの影響の大きさを述べているが、そのことは「今のところは一般企業に就職して。特にそこ (海外とやりとりとかという基準) を重視とかはしていないですね。」と就職に際しての影響はないとしている。

4. まとめ

本研究ではGAME ON ENGLISH というラグビーと語学研究を組み合わせたホームステイ型の留学プログラムに高校生時に参加した8名にグ

ループインタビュー形式で半構造化面接を行い、彼らが高校から大学へと進学していろいろな活動に取り組む中で、また大学卒業後の進路選択を考えるにあたって、どのような影響を留学経験から受けていると認識しているのかを語りを図1の径路モデルに基づき検討した。ラグビー活動への影響については、これまで西尾（2017）で、「現地高校と（ラグビーの）練習と試合ができたこと」、「ラグビーがより好きになり英語も好きになった」などがよかった点として挙げられていたこと、石盛・西尾（2020）で、留学経験がラグビーも含めた文化の違いを認識する機会を提供していることを明らかされるにとどまっていた。

本研究の分析の結果、部員の留学経験を通じて、日本の部活動の長時間練習の問題点や指導者の部員の自律性支援の重要性が改めて浮かび上がってきた。この問題に関しては、部活動における季節制の導入など制度的な改善が必要なため、短期海外留学プログラムの実施だけで解決されるわけではないが、高校生という発達段階において、チームとしての勝利を目標にすることと自由に楽しんでラグビーに取り組むことが両立しているニュージーランドのラグビー文化を経験することが、アスリートのデュアルキャリアにも好影響を与えることがいくつかの事例において示唆された。英語学習については、GAME ON ENGLISH にはラグビーという共通に取り組むスポーツを通じての現地高校生との交流という特徴があるものの、これまでの先行研究で示された短期留学の効果と大きな違いは見られなかった。

大学卒業後の進路選択への留学経験の影響はそれほど直接的ないものではなかったが、多くの参加者にとって、英語学習への積極的な関与等を通じた間接的な影響を及ぼしていた。本研究は8名という限られた参加者に対する調査結果であり、まだ大学生という学校段階での留学経験の影響についての検討であった。今後は調査対象数を拡大するとともに、就職後にどのようなキャリア形成を行っていくのかを追跡的に調査していくことも必要とされる。

引用文献

千島 雄太（2015）．青年期における自己変容のメリット・デメリット予期に伴う葛藤：学校段階による比較．発達心理学研究, 26, 1-12.

独立行政法人日本スポーツ振興センター（2014）．「デュアルキャリアに関する調査研究」報告書. https://www.jpnsport.go.jp/Portals/0/sport-career/PDF/dualcareer_report_jsc_2013.pdf（2020年4月20日閲覧）

エデュケーション・ニュージーランド（2017）．政府公認の留学プログラム「Game On English」帰国報告会を実施. https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000021490.html（2020年3月21日閲覧）

Erikson, E. H.（1959）．*Psychological issues identity and life cycle*. International Universities Press, Inc.（小此木啓吾，訳編.（1973）．自我同一性―アイデンティティとライフ・サイクル．誠信書房．）

フォンテラジャパン（2019）．「高校生ラグビー選抜選手、ラグビー王国ニュージーランドへ！」https://www.fonterra.com/jp/ja/latest-news/article_32.html（2020年3月21日閲覧）

深見英一郎・井上一彦（2019）．運動部活動における指導者の主導性に関する意識と部員の形成的評価との関係．体育学研究, 64,369-384.

早矢仕彩子（2002）．日本人学生の留学体験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究．静岡大学『人文論集』, 53, 39-55.

池本雄基・伊藤豊彦・杉山佳生（2013）．指導者の支援的行動が中学・高校運動部員のバーンアウト傾向に及ぼす影響―自己決定理論からのアプローチ―．島根大学教育学部紀要（教育科学）, 47, 51-60.

石盛真徳・西尾建（2020）．ニュージーランドへの短期留学の英語学習、スポーツへの関わり方、および進路選択への影響：Game on Englishプログラム参加者データのテキスト内容分析に基づいて．追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー, 12, 17-25.

伊藤裕子（2001）．青年期女子の性同一性の発達―自尊感情，身体的満足度との関連から―．教育心理学研究, 49, 458-468.

Kiecolt, K.（1994）．Stress and the decision to change oneself: A theoretical model. *Social Psychology Quarterly*, 57, 49-63.

文部科学省初等中等教育局国際教育課（2011）．「平成23年度高等学校等における国際交流等の状況について」.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/08/23/1323948_02.pdf（2020年3月21日閲覧）

文部科学省（2013）.「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」. https://tobitate.mext.go.jp/hs/program/（2020年4月20日閲覧）

文部科学省（2018a）. 社会総がかりで行う高校生国際交流促進事業. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/12/27/1323961_001.pdf（2020年4月20日閲覧）

文部科学省（2018b）. 学校基本調査－平成30年度結果の概要－調査結果の概要（初等中等教育機関、専修学校・各種学校）https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_2.pdf（2020年4月20日閲覧）

長井進（1986）. 日本交換留学生の異文化への適応過程 教育心理学研究, 34, 55-61.

中間玲子（2013）. 自尊感情と心理的健康との関連再考―「恩恵享受的自己感」の概念提起―. 教育心理学研究, 61, 374-386.

中澤篤史（2011）. 学校運動部活動研究の動向・課題・展望：スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて. 一橋大学スポーツ研究, 30, 31-42.

日本ラグビーフットボール協会（2019）.「2019年ラグビーワールドカップ普及啓発事業　ラグビーを通じた国際交流プログラム事業（派遣型）. https://www.rugbyjapan.jp/RugbyFamilyGuide/pg330.html（2020年3月21日閲覧）

西尾建（2016）. ニュージーランドを参考にした中高生部活動改革―2つ以上のスポーツが楽しめる部活動システム導入―. スポーツ産業学研究, 27, 69-72.

西尾建（2017）. アンケートによるGame on English プログラムレビュー. 日本ニュージーランド学会誌, 24, 24-28.

野村駿・太田知彩・上地香杜・加藤一晃・内田良（2019）. なぜ部活動指導は過熱するのか？：過去の部活動経験との関連から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学, 65, 109-121.

大前佑斗・糟谷理恵子・吉野華恵・三井貴子・高橋弘毅（2016）. 留学経験が自発的活動・キャリア形成に与える影響の検討. 日本教育工学会論文誌, 40, 21-24.

岡田努・永井撤（1990）. 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連. 心理学研究, 60, 386-389.

奥山和子（2017）. 留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス―質的研究手法を使って―. 大学教育研究, 25, 83-101.

新見有紀子（2016）. 短期海外留学経験が就職・進路に関する意識に与える影響について：帰国後インタビューからの考察　留学生交流・指導研究, 18, 31-44.

新見有紀子・秋庭裕子（2016）. 学部レベルの海外留学経験が能力・意識の自己評価にもたらすインパクト―学位取得目的、単位取得目的留学経験者と留学未経験者に対するオンライン調査結果の比較より－留学生教育, 21, 37-44.

鈴木薫（2018）. ニュージーランド体験型海外研修プログラムの検証：テキストマイニングによる研修日誌の解析. 名古屋学芸大学研究紀要. 教養・学際編 研究紀要, 14, 1-20.

田浦秀幸, 堀井耕太郎, 馬西卓徳, 岡田宏子, 清水大介, 柏本恵未, & 戸成辰也（2009）. ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察. 言語文化学研究, 4, 1-22.

内田良（2017）. ブラック部活動―子どもと先生の苦しみに向き合う 東洋館出版社.